

3

「とんでもない」を丁寧(ていねい)に言う

「ない」を丁寧(ていねい)にすると「ございません」「ありません」「時間がない」は「時間がございません」「ありません」となります。

ほめられたり、感謝(かんしゃ)されたりしたときに、それを打ち消すように言うのが「とんでもない」です。ところが、謙遜(けんそん)する気持ちが含まれてい(ふくま)るのに、敬語(けいご)の表現にはなっていません。丁寧(ていねい)さを補(おぎな)う気持ちから、「とんでもございません」「とんでもありません」の言い方ができたのでしよう。

しかし、「とんでもない」は「とんで(も)」というものが「ない」ではありません。「とんでもない」は一つのまとまった言葉で、「ない」だけ切り離(はな)し、「ございません」に変(か)えることはできないはず。そこで、「とんでもない」をそのまま残(のこ)し、「とんでもない」と続けるのが正しいとされてきました。

ただ、今は「とんでもございません」がおかしいと感じる人は少なくなっています。伝統的(でんとうてき)な文法(ぶんぽう)からは外れていても、便利(べんり)に使(つか)われているあいさつ表現(ひょうげん)の一つです。



正しく言ったら誤解(ご)された?

二〇〇三年度「国語に関する世論調査」では、「とんでもございません」という丁寧語を使った言い方が「気になる」は一七・八%、「気にならない」が六八・三%で、かなり広く受け入れられているという結果が出ています。「敬語の指針」(二〇〇七年二月文化審議会答申)も、「相手からの褒めや賞賛などを軽く打ち消すときの表現」として使うのに「問題ないと考えられる」と述べています。

ところで、「とんでもない」には、「鼻から牛乳を飲むなんてとんでもない」のように、常識外れのひどい様子を表す使い方もあります。もしこれを敬語で言うなら、「鼻から牛乳を召し上がるなんてとんでもございません」ではなく、「鼻から牛乳を召し上がるなんてとんでもないことでございます」となるはず。このような使い方があるので、褒められたのに対し、謙遜して否定するとき、「とんでもないことでございます」と応じると、「褒めたこと」＝「とんでもないこと」と受け取られるおそれもありそうです。とすれば、意味によって、「とんでもないことでございます」と「とんでもございません」の二種類の敬語表現を使い分ける方が合理的だということになるでしょう。

